

観光立国には国民の意識改革を

小泉内閣が観光立国を宣言し、2013年には外国人訪日旅客数を現在の倍増、1千万人を指すとぶち上げた。だが、先日の世論調査による国民意識の低さには愕然とした。外国人を歓迎しようという気持ちより、外国人の増加による彼らの犯罪の増加が怖いという、およそ国際化時代に逆行する小心さが顕在化して、日本人の鎖国意識を少なからず露呈した。

巷でも小さな草の根の国際親善は堅実に築かれつつある。それが、大上段にふりかぶるとどうしてこのような排他的な考えが顔を覗かせるのだろうか。

国際化は、理屈や制度なんかより、国民一人ひとりの「明るいスマイル」と「他人の気持ちをいかに斟酌することができるか」の気持ちひとつにかかっている。かつて、あるアメリカ政府の高官は、日本人外交官に何を求めるかと問われたとき、即座に「笑顔のいい人」と応えた。同時に国際人とは、いつも相手の立場を考えながらものを考える人のことでもある。日本人が観光立国を謳い、国際化を図るには、残念ながら国民意識の面で前途はまだ多難と言わざるを得ない。

近藤節夫